

愛した冬山の高みへ、思いを馳せて

山をこよなく愛した人でした。

二十八歳のときに『シエルピ・カンリ』の登頂に成功。

山に登る事、そして下山した後、登山仲間とお酒を呑む事を、何より楽しみにしていました。家では無口で、何を考えているのだろうと思う事もありました。でも、山を見ている時の主人の顔を見て、ああ、こんなうれしそうな顔をするんだ：と思ひました。独立して自分で設計事務所を始めてからは、夜遅くまで仕事をする毎日。あと一年で仕事を引退して、その後は存分に山登りを楽しもうと考えていた矢先の事でした。

登山歴四十五年。冬の富士登山も約二十四回経験しており、今回も登山計画書を提出して、冬山装備で臨んでいました。

夢を叶えさせてあげたかった。でも、大好きな山で亡くなったことは、夫にとっては幸せだったと信じています。それが家族にとってはせめてもの救いです。

今、初冬の優しい日の光の中に、黙々と庭いじりをしている夫の姿が思い浮かびます。いつもなら、家中の窓を外して綺麗に拭いてくれた季節。今年は冬用のタイヤ、誰に換えてもらえばいいのでしょうか…。

夫緒方俊治は平成二十四年十二月一日、高い空の頂上へと登っていききました。

「向こうで、山の仲間や父、母に会ったら、沢山語り合ってね。

そして向こうの山にもまた登って下さいね」
悲しみは流れゆくあの雲にたくし旅立ちを見送ります。

生前ご厚情を賜りました皆様へ、深く感謝申し上げます。
本日のご会葬誠に有難うございました。

略儀ながら書状をもって厚く御礼申し上げます。

平成二十四年 十二月四日(通夜)
十二月五日(葬儀式)

兵庫県神戸市北区鹿の子台北町六一一八一七

喪主 緒方 順子

親戚 一同

尚本日何かと混雑に取り紛れ不行き届きの段悪しからず御容赦下さいませ様御願ひ申し上げます。
この会葬礼状は少しでもご家族の想いをお伝えできればと
ご遺族様よりお伺いしたお話を基に、お礼状とさせて頂きました。

メモリアングループ謹製